

# 29M-am12

ネパール産生薬 Tulsi の抗リーシュマニア活性物質に関する研究

○鈴木 亜希子<sup>1</sup>, 黒柳 正典<sup>1</sup>, 代田 修<sup>2</sup>, 森 加奈未<sup>2</sup>, 関田 節子<sup>2</sup>, 渕野 裕之<sup>3</sup>  
(<sup>1</sup>県立広島大生命環境, <sup>2</sup>徳島文理大香川薬, <sup>3</sup>基盤研薬植セ・筑波)

【目的】リーシュマニア症は吸血昆虫のサシチョウバエが媒介する熱帯地域の深刻な感染症で、全世界に 1200 万人の感染者がいると推定されている。現在の治療薬は高価で副作用も強いため、安価で副作用の少ない新規治療薬の開発が求められている。そこで、熱帯地域で採集した数十種類の植物についてスクリーニングを行った結果、抗リーシュマニア活性を示したネパールの生薬 Tulsi (*Ocimum sanctum*) について成分研究を行った。

【方法・結果】ネパール産の Tulsi の葉 1kg をメタノールで還流抽出し、得られたエキスを酢酸エチル、ブタノール、水で分配した。このうち酢酸エチル相について各種クロマトグラフィーを用いて分離・精製し、OS-1~OS-21 と仮称する 21 の化合物を単離した。各種スペクトルデータを解析する事で構造を決定し、そのうち OS-1~OS-7 は新規リグナン誘導体と推定している。新規化合物の立体配置については現在検討中である。得られた化合物について抗リーシュマニア活性 (*Leishmania major*) を測定したところ新規化合物の 2 種 (OS-3, OS-6) と既知化合物の ursolic acid , ferulaaldehyde に活性が認められた。

